Atlas X, 2014　cotton thread, textile hardener, copper, brass
Installation made up of 46 items
40x60cm and 100x120cm, detail

I

I Vangeli del faggio, 2016
textile collages, 12 elements 40x50 cm, detail.

おたふく自画像ワークショップ　10月13，14、22，23日に大町リノプロにて実施

創造物というものは新しいわけではありません。しかし私たちが古いものを変質させて新しい形にする時、アートが生まれます。私は大町に訪れて、この町の歴史や文化に属する場所や物に出会い、その人類学的な感覚を理解する事に努めつつ、今回のテーマである「時・水・稲作」との関係性を模索しました。そして、そのテーマや象徴的なオブジェに対して、今までに無かった新しい視点を提案します。
「囲炉裏」は部屋に浮かぶビンテージの大きなアイコンになり、「おたふく」はピンクの神様として、ワークショップ参加者によってリデザインされ、「稲荷」はマンガのキャラクターの様な着物をまといます。作品「狐と宝」の空間は、一時的に存在する、言葉やイメージの境界を超えて小さな世界です。

The creation never is something of new, but everything we trasform from old things to new forms may be art. When I saw the objects and the places belonging to the history and the culture of this city, I tryed to understand their anthropological sense and their connections with the topics of rice time and water. I decided however to play with this signs giving them a new perception rather than take their meaning for granted. The “irori” becames a big vintage icon floating in the room Otafuku is a pink goddess whose face is redesigned by the people who attended in the workshop, and Inari wears a kimon like a manga character. “Fox and the jewels” is the small, temporary world, where the borders of words and images can be crossed and shifted.

マリーナ　ガスパリーニ　Marina Gasparini

1960年、イタリアのガビッチェ・マーレに生まれ、ラヴェンナ美術アカデミーを卒業。画家として作家活動を開始し、90年代よりテキスタイルを用いたとした新しい表現方法を確立。2000年よりNET ARTのオンラインプロジェクトに参加。日常の発見をテーマに、テキスタイルを用いた住空間と言語によるインスタレーションを制作。個展やグループ展に多数参加し、近年はミラノ・トリエンナーレやポーランドのテキスタイル中央博物館で開催されている国際タペストリートリエンナーレに出展。ヴェネツィアの美術アカデミーでの教職を経て、現在はボローニャで教鞭をとる。開催した主なワークショップは「マッピング・サラマンカ（スペイン・サラマンカ大学）2010」、「アーキスケープ（フィンランド・オウル美術館）2012」、「ストリング・ポートレート（米イリノイ州・ゲイルズバーグ市民美術センター）2013」、「アルファベトランテ（ポルトガル・リスボン大学及びトルコ・ミマールスィナン大学）2013」等。

マリーナ・ガスパリーニ：狐と宝
展示場所：大町リノプロ 1F
信濃大町あさひアーティスト・イン・レジデンス滞在制作展
稲穂の実る音 SOUNDS THAT GROW THE RICE
２０１６年１１月１１日［金］－ １１月２０日［日］
大町市街地三カ所　＋　鷹狩山山頂古民家

信濃大町 AIR 事業推進協議会 事務局
〒398-8601　長野県大町市大町 3887
（大町市役所　総務部まちづくり交流課内）
E-mail: asahi-air@shinano-omachi.jp
TEL: 0261-22-0420　/　FAX: 0261-23-4304
発行：信濃大町アーティストインレジデンス事業推進協議会
助成：アーティスト・イン・レジデンス in 信州 モデル事業

マリーナ・ガスパリーニ
Marina Gasparini
狐と宝
The fox and the jewels

信濃大町
あさひAIR
http://shinano-omachi.jp/asahi-air

マリーナ・ガスパリーニ

Marina Gasparini / イタリア

Interview

■信濃大町での滞在制作はいかがですか？
今回のあさひ AIR の滞在制作で、私は初めて日本に来ました。空港についてタクシーでそのまま信濃大町に到着したので、大町で日々、日本文化を感じてとても刺激的な生活をしています。最初に興味をもったのは、大町市史に掲載されていた囲炉裏のイラストでした。その幾何学的な形に興味をもって、このイラストから、私の創作活動は始まったんです。

■マリーナさんは子供の頃、何をして遊んでいましたか？
私は 5 歳のころ、アフリカのナイロビに住んでいました。近所に 3 ー 4 人、イタリア人の子供たちがいて、よく一緒に遊んでいました。絵を描くのがすごく上手な年上の男の子がいたので、負けたくなくて雑誌や絵本の絵を真似して描いて練習してました。ずっと絵を描いていた記憶があって、その理由はふたつ。1 つ目は、上手に絵を描くとみんながほめてくれたこと。そして 2 つ目は、立体的なおもちゃの代わり。本当は着せ替え人形で遊びたかったんですが、可愛い人形がなくて、だから現実の延長線上に絵を描いていたんだと思います。

■なぜ、アーティストになったのですか？
絵が好きだったので視覚的な仕事には昔から興味を持っていました。アーティストというのは、他の人から呼ばれるものだと思うので、自分自身をアーティストというのは変な感じがします。私が学生だった 70 年代後半のイタリアは政治的に安定していなくて、様々な悲しいことがありました。だから 70 年代後半のアートはとても社会的だったんです。コンセプチュアルアートとか、パフォーマンスとか、アートと政治と社会活動が密接に関係していた時代で、手仕事が好きな私としては、最初はよくわかりませんでしたが、1981 年に初めての展覧会を ALEPH（アレフ）というディスコで開催しました。ラップやヒップホップ等の黒人音楽をイタリアに先進的に持ち込んだ刺激的な場所で、私にとって社会との接点でもありました。今考えると、アートを続けているきっかけは、その時だったのかもしれません。

■今回のマリーナさんの作品について教えてください。
今回の展示は、囲炉裏をイラストどおりに白い糸で巨大化した作品「囲炉裏 / 稲荷」と、ワークショップでおたふくのお面を模ったピンクマスクに自画像を縫い込んだお面を使用したパフォーマンス作品「Riso Rosa Blessing」、そして全体をまとめた「狐と宝」という 3 つの作品で構成します。
私は制作過程を大切にしています。大町に来て、囲炉裏の幾何学的なイラストと出会って、囲炉裏の象徴的な意味、火、一緒にいること、家庭、などから連想するモノづくりのプロセスを楽しみたいと思っています。今回のテーマである「時・水・稲作」もその最初のテーマです。例えば、お米を意味するイタリア語の RISO には、同時に笑うという意味があります。西洋式の結婚式でお米を新郎新婦に向かって撒くのは、食べる事に困らないように、という意味のある儀式的な行為です。そこで、笑顔の仮面であるおたふくに注目し、ピンクの糸で自画像を描いてもらうワークショップを行いました。
おたふくのお面をつかっていてこんな事をいうのも変なんですが、私は実は仮面が嫌いなんです。私が住んでいたベニスでは 16 世紀から冬に仮面をかぶって外を歩く風習があります。仮面をかぶっていると誰だかわからなくて、とても怖い印象でした。仮面をする行為は精神分析的な観点から言うと、キャラクター（人格）の「死」と繋がっていて、それが受け入れられなかったのだと思います。17 世紀以後には仮面をかぶった犯罪が増えて法律で仮面をかぶることが禁止になり、現在では 11 月の 2 週間だけ、ベネチア仮面カーニバルという形でその歴史が残っています。色々考えた末、ピンクマスクをかぶってパフォーマンスを行うことにしました。

囲炉裏 - 火 - 家族 - 時 - 水 - 稲作
お米 - 笑い - 結婚 - 仮面 - 死 - パフォーマンス

私にとって、この連想ゲームのような制作プロセスは、一つの知的な作業なんです。私は知性には 2 種類あると思っていて、ひとつはゴールに向かって一直線に進む理性的な効率重視の知性、そしてもう一つは家庭的で直観的なプロセス重視の知性です。テキスタイル（織物・布）とテキスト（文）は、様々な要素を織り込んでいくという意味で同じ語源を基にしていて、縫うという行為には、その時間を楽しむような瞑想的な知性があります。

今年の 4 月にミラノトリエンナーレというテクノロジー（科学技術・工業技術）デザインの祭典に呼ばれたんです。そこで私の作品が手仕事のエリアで紹介されて、記者の一人が「編み物がテクノロジーだってさ」と笑っていたのが印象的でした。縫うという行為は基本的なテクノロジーですし、現代の根本的な課題として、道具を使うのか、道具に使われるのが、ということがあると思います。IT がいくら発達しても、それを活用する人間が育たなければ、本当の創造性は生まれないんです。ワークショップで、小さな子供が縫うのにすごく集中していたんです。IT 世代の子供たちが退屈せずに縫う作業を楽しんでいるのが、すごくうれしかったです。

■大町の皆さんに一言お願いします。
大町に来て、人々がとても親切で驚いています。親切さや優しさによって他人と関係する日本文化に感銘をうけました。日本人が親切だという事は世界的にも有名ですし、ステレオタイプな認識しかしていませんでしたが、大町で実際に体験して、お互いの親切さで社会が持続されている文化は世界的に見ても多く残っていないように思います。それはとても深い人と人の関わり方だと思いますし、それを教えてくださった大町の皆さんにとても感謝しています。